

# 海を思う

●文／金丸弘美

海は、生を育むところであり、人の営みそのものであり、永遠の遊び場だ。それはどんな立派な建物だつてかないっこない。

故郷を離れて東京に住むようになって、毎年夏になると田舎の海辺に立つのは、僕の行事になっている。砂浜の波うち際で裸足になると、打ち寄せる波が足の回りから砂を運んでいく。このときの感覚は、足元から頭へスツと、海へ吸い込まれていくかのようだ。その瞬間にまるで永遠の船に乗ったかのようになり、幼少の頃の記憶が蘇ってくる。

僕の生まれた佐賀県唐津市の唐津は、その名の通り、海外とを繋ぐ港の意味あいをもっている。玄界灘の向こうにすぐ朝鮮があり、中国がある。唐津は、かつて海外のことを指した伽羅からきているともいわれる。

海辺には慶長7年、寺沢志摩守広高によって造られた、海に迫り出した城が今もあって、その城を中心に海に向かって左右に白い遠浅の砂浜が広がり、右手には湾の弧にそって江戸時代に防風林の役割として植えられたという松原がずっと続いている。

松原は虹の松原と呼ばれるのだが、海に近い鏡山に春先に登り、山から海を見ると、空の青と雲の白と海の紺と藍のグラデーション、うす茶色の砂浜、松原の濃い緑、菜の花の黄色、蓮華の赤、畦のうす緑。それらが見事に繋がって、本当に虹のように見えるのだ。僕は5歳までを、虹の松原のある東の海辺で、

▼浜辺が侵食されてしまった



Photo: 鈴木謙輔



▲2歳の時、唐津の海にて

小学3年までを西の海辺の家で過ごした。だから、海辺はいつも遊び場だったし、夜に布団に入ると、波の寄せる音が、眠るときの調べだった。小学4年のときに、まだ田んぼが広がっていた町田という田園地帯に越しても、子供の足で20分も歩けば海になり、やはり中学も高校も海辺は遊び場だった。

夏に遠浅の海に入り、足を滑らすと、足先に、赤貝や蛤がすぐぶつかった。城の城壁の下は岩場になっていて、その岩の影ではツガニ(藻屑蟹)が取れた。僕の友人はこの蟹取りの名人で、彼が発明したという、蟹を岩場の奥から取り出す太い針金の先を曲げただけの俗称カギンチョと言ふ道具は、彼が使うと、なんだかとてもない発明に見えた。

岩場には、ニナ(シツタカ)がいたし、岩の間には、カメノテという、本当に亀の手そっくりの黄色い貝がいた。ニナもツガニもカメノテも茹でて食べると美味しかった。砂浜は、さまざまな貝殻がうちあげられて

いる。桜貝の薄いピンクの色、角貝の白、それらは、まるで宝石のように思えた。夏は砂浜に無数の蟹の穴ができて、浜辺にしかない、僕は競馬蟹と呼んだ、足の早い小さな蟹が巣を造る。その巣の穴に真っ白い砂を流しこみ、白い砂を目当てに穴の奥深くにいる蟹を指して掘り進む。そして蟹を捕まえて、砂で競馬場を造り、競争させるのである。

海辺にいと、飽きることがない。蟹や貝や砂遊びに興じていると、たちまち一日が過ぎ夕暮れとなって、おまけに服は砂と塩水だらけで、いつも母に怒られた。今思うと、海辺は少年の日々と時間が、海に反射する太陽のきらめきとともに、永遠に閉じ込められていたかのような気さえするのだ。

唐津の砂浜の白さが、どんなに美しいかと思ったのは、他の海を知った、20代過ぎの頃だった。余所の海の色を知れば知るほど、唐津の海がいと美しく素敵に思えた。

自分に子供が生まれたときに、一緒に海辺に立つのが夢になった。その夢はほどなく叶った。2人の子供ができた今、僕は、毎年唐津の海辺に立つのである。僕の少年時代の海にあった記憶を子供たちと共有するために。

しかし、いつの頃からか海辺は変わっていった。沖合で工事のための砂を取り、海に流れこむ川の一部分が埋め立てられ、その頃から徐々に、流れが変わり、海岸の砂が沖に運ばれるのだから、砂浜はなくなり始めた。砂浜の変わりに一部はセメントで無残にも固められてしまった。毎年、磯の小さな生き物たちの姿が一つ一つ消えていく。海に立つ度に、子供の頃の永遠のきらめきを閉じ込めていた海辺の扉はどこにあるのか、僕は子供と一緒に扉を探して戸惑っている自分があるのを、知るのである。

かなまるひろみ／1952年佐賀県唐津市生まれ。作家。出版プロデュース、講演なども手がける。著書に「えんや 写真集・唐津くんち」「こんなSCENEで贈り物」「こんなシーンでウェディングベル」「プレゼントの小さな焼き菓子」「アトピーに克つネットワーク」など多数。一線の編集者とライターの親睦会「ライターズ・ネットワーク」主宰。日本ペンクラブ会員。